

思考特性からモチベーションを向上させ 「社会人基礎力」を高める試み

大脇 巧己*1・木下 英男*2・蔵下 克哉*3・河口 紅*4・吉田 賢史*5
Email: owaki@sanps.com

- *1: NPO 法人さんびいす
- *2: 株式会社ケーホウ
- *3: KE 教育コンサルタント
- *4: NPO 法人さんびいす
- *5: 早稲田大学高等学院

◎Key Words 思考特性, キャリア教育, アクティブラーニング, 就職支援

1. はじめに

生徒それぞれの特性に適した「学びのスタイル」が存在し、教員と生徒の思考特性や行動特性の違いから、教員にとってわかりやすい説明や教材であっても、特性の異なる生徒にとっては、必ずしも「わかる」教材になっていないことについて、我々はこれまで研究⁽¹⁾を重ねてきた。また同時にこれまで多くの学校で行われてきた生徒が教師から知識を教わる受け身の学びではなく、生徒自らが疑問を抱き、探究心を持ち未知のものを知りたいと自発的に考える能動的な学びの実現についても議論を重ねてきたが、この度ひとつのヒントにたどり着くことが出来た。

それは兵庫県の公立高校の生徒 240 名の思考特性と行動特性をエマジェネティックス⁽²⁾の STEP(Students / Teachers Emergenetics Profile)を用い確認したところ、一般的な特性分布に比べ大きな偏りがあることが確認された。この高校の卒業後の進路は、大学進学より就職者の割合が多く、高校入試時の偏差値が 40 台前半の高校である。この高校と東京の私立中学校で入試時の偏差値が 60 台後半の学校の生徒 252 名のデータを比較したところ、やはり双方に特徴的な差がみられた。そこで思考特性と行動特性と生徒のモチベーションの関係を究明し、学力面だけでなく経済産業省が提唱している「社会人基礎力」を育むカリキュラムを大阪府、兵庫県の公立高校の協力を得て開発し、進路選択や就職活動の支援へとつなげていく。

2. 思考特性からみられる生徒の特徴

2.1 STEP による判定

STEP では、生徒の思考特性を「左脳-右脳」「抽象-具象」の 2 軸に分け、計 4 つのタイプに分類し、それぞれの思考特性に対する優位性（無意識で活発に使う事ができる脳の部分）の有無と、パーセンタイル（その人が持つ思考特性が外部に現れる強さを 100 人が一列に並んだと仮定し、数値が高いとその特性が顕著に表れ、数値が低いほど特徴が表に出づらい事を示す）を知ることができる。また今回は詳しく触れないが、行動特性についても自己表現性・自己主張性・柔軟性

の 3 つの項目に分けその傾向を判定することができる。

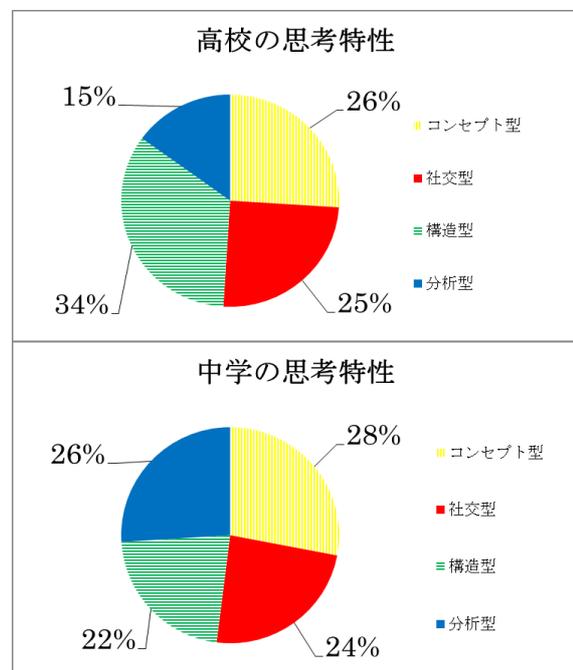


図 1. 中学と高校の思考特性の比較

※優位性は全体を 100%とし、23%以上の場合優位性があると判定される。

2.2 生徒の特徴

エマジェネティックスの 40 万人の統計データからは、2 つまたは 3 つの思考特性に対し優位性を示す人が全体の 94%と大半を占め、シングルタイプ（4 つ思考特性のうち 1 つだけに優位性を示す人）はそれぞれ全体の 1 ~2%、ALL タイプ（4 つの思考特性の全てに優位性を示す人）の割合は、全体の 1%未満との結果が出ている。しかし、今回調査した高校の生徒からは ALL タイプと判定された人が全体の 3.7%もいることがわかった。同様に分析型に優位性を示す割合は過去データが 67%に対し高校の生徒は 26%しか無かった。このため、中学の生徒では優位性を示すが、高校の生徒は全体としては分析型に優位性は現れなかった。(図 1)

その上、4つの思考特性すべてのパーセンタイルが低い(図2)ことがわかった。

この数値が低い場合、他人からは「こだわりが少ない」「積極性があまり無い」と解釈される。また分析型は左脳(言語思考優性)―抽象思考タイプの特性であり、論理的思考や情報の収集や分析、プロセス認識などを司る部分であるためこの部分に優位性が無いという事は、①論理的な考え方が苦手②物事を点としては捉えられるが、個々の点をつなぎ線として考えることが不得意な生徒が多い事を意味している。

ALLタイプの生徒の比率が高かった理由については科学的な根拠は残念ながら無いが、ALLタイプの生徒のパーセンタイルのほとんど全てが最低値に近かったことから、みずから物事を判断すること自体が苦手で拒否をしている可能性が高いと推測できる。これらの結果から今回思考特性を確認した高校の生徒は①物事に対する積極性や執着が低い②物事に見通しを付け、将来起きる可能性のある出来事を推測や予測し、事前に何をしなければならぬかといった仮説を立て準備をするといった能動的な行為自体が苦手な生徒が多いと推測される。

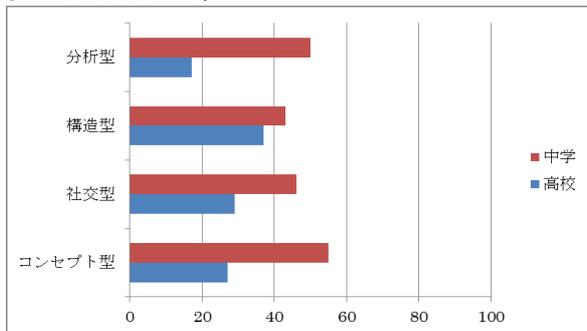


図2. パーセンタイルの比較

2.3 解決すべき問題

高校、大学においてキャリア教育に対するニーズが高まる中、経済産業省が提唱した「社会人基礎力」は産学が連携してこれからの社会に必要な人材に必要な力が何かを定義したものである。この中で産業界と就職を目指す学生が共にもっとも重要な力と位置づけながら、学生が最も苦手と答えているのが「前に踏み出す力(アクション)」である。この力は単独の能力ではなく、残りの2つの能力「考え抜く力(シンキング)」と「チームで働く力(チームワーク)」を土台に自ら経験を積み、はじめて生まれる力なので一朝一夕に身に付くものではない。ましてや土台である論理的思考(シンキングスキル)が苦手かつ積極性に乏しい生徒にとって更に克服が難しい能力であるといえる。

この為、学力に特化した授業だけではなく、社会で求められる適切な能力を育むためのキャリア教育や「社会人基礎力」を育てるカリキュラムの開発と授業での実践が、進学より就職を目指す生徒を抱える高校において求められる。

3. 開発中のカリキュラムと授業実践

3.1 開発のねらい

社会人基礎力の中でも最も重視される「前に踏み出

す力(アクション)」を育てる為にも、まずは土台である「考え抜く力(シンキング)」に必要な分析型の力を強化し、「チームで働く力(チームワーク)」を育てる為にコミュニケーション力を高めるトレーニングを1年生の時期から順次計画的に行っていく事が重要である。

3.2 授業実践と開発中のカリキュラム

大阪府と兵庫県の公立高校と平成26年4月より表1の取組みを開始している。(5月末で授業を実施した学校2校、今後実施する予定の学校3校)

表1. 開発中のカリキュラムの3年計画

授業枠	総合学習または進路行事の時間を活用
授業回数	1学期に1~2回程度(合計2~6時間程度)
内容	1年次: 思考特性からのアプローチ ・自分の思考特性を知り、得意不得意を把握して、他人との違いに気づく 2年次: 行動特性からのアプローチ ・将来の目標のために、意識した行動を身に付ける 3年次: 進路選択からのアプローチ ・自己実現に向けた目標と達成までの計画を立て実践する力を養う

4. 今後の課題

当研究の成果は学力と違い、単純に統計量変化で測れるものでない。また、就職支援についても単に就職者率だけで評価できるものではない。さらに、本研究の目的である「社会人基礎力」の能力向上においても評価基準は未だ確立されていない。

しかし、学力とは違う就職支援を軸とした思考特性と行動特性を考慮したアクティブラーニングは、「社会人基礎力」の向上に繋がるだけでなく、学力の向上にもつながる可能性は高い。今後、多様な学校と協力して多くの偏りの少ないデータから評価基準と成り得るファクターを見いだすことが課題である。

また、当実践研究を継続的に進めるため、共著者と共にアクティブラーニング協会(ALA: Active Learning Association)を立ち上げ、思考特性と生徒のモチベーションの関係究明と、生徒の社会人基礎力の向上を目指した3年間の継続的なカリキュラムの開発と実践を開始している。

現時点では高校を中心に研究をしているが、研究の成果は、将来的には大学における就職活動への応用も可能なものと考え協力校を広く募集していきたい。

参考文献

- (1) 吉田賢史, 大脇巧己, 河口紅, 武沢護, 篠田有史: "学習者の思考スタイルによる学習効果の差異", Proc. of 2010 PCカンファレンス, pp.249-250 (2010).
- (2) 篠田有史, 松本茂樹, 高橋正, 鳩貝耕一, 河口紅, 吉田賢史: "2つの教示方法の比較で検討する学びのスタイル" Proc. of 2013 PCカンファレンス, pp.257-258 (2013).
- (3) ゲイル ブラウニング著, 大野晶子訳: "エマジェネティックス", ヴィレッジブックス (2008).